ともに新しい扉をあけよう

Let's create our bright future

宮本恒靖

ご挨拶

日本サッカー協会が創立100周年を迎えた2021年9月10日、JFA100周年セレブレーションが行なわれ、私も出席しました。私の知っている日本サッカーの歴史と言えば1964年東京オリンピックのアルゼンチン戦での逆転勝利からでした。しかしそれ以前から続く活動や取り組みがあり、日本サッカーに携わってきたみなさんがそれらを綿々と受け継いできたからこそ、世界に誇るべき成長と進化のストーリーがあったのだと理解できました。

私は日本サッカーが次の100年を歩んでいく際に、先人から受け継いだものを次の世代に継承していくことはとても重要だと考えています。また、継承＝「守り」と併せて革新＝「攻め」のアクションを起こしていくことが新たな成長につながるとも信じています。2023年3月にプロジェクトリーダーとして取りまとめた「JFA中期計画2023―2026」では新型コロナウイルス感染症の拡大やウクライナ危機など社会情勢、国際情勢がめまぐるしく変化していくなかでも、サッカーの価値は不変だと発表しました。そのような時代において発揮できるサッカーの力を信じているからこそ、私は日本サッカー協会会長に立候補しました。日本のサッカーの更なる発展に貢献、尽力していきます。

JFAは「2005年宣言」において2050年までにFIFAワールドカップを日本で開催し、その大会で優勝することを記しています。SAMURAI BLUE、なでしこジャパンの活躍を見ても今、新しいフェーズに入ってきていることを確信しています。国際舞台で常に上位に進出するためには強化のみならず、普及、育成が大切になっていきます。そのように男女ともに強い代表チームであり続けることが、日本サッカー全体をより大きくしていくことにつながると考えています。選手として指導者として、ワールドカップを戦った日本代表OBとして培った経験をしっかりと活かしていければと思っています。

各世代の代表チームでキャプテンを務める名誉をあずかりましたが、私は「俺についてこい」というタイプのリーダーではありません。仲間の意見に耳を傾けながら、仲間を後押ししながら、逆に後押しされながら、これまで日本のサッカーを支えてきたみなさんと、これからの日本サッカーのために一緒になって前へ進んでいきたいと思っています。40代なかばの自分はまだまだ若輩者。みなさん一人ひとりの力が必要です。

一つになって新しい扉をあけようではありませんか。
日本サッカーの明るい未来を、築いていこうではありませんか。

日本サッカー協会専務理事　宮本恒靖

ともに新しい扉をあけよう

CONTENTS

挨拶 02
「変わらぬ思い」 04
略歴 05
岡田武史×宮本恒靖 特別対談 06
JFA中期計画2023―2026について 12
・日本代表の活躍 14
・スポーツ・サッカーの拡大 18
・社会課題への挑戦 22
・新たな成長モデルの構築 24
・ガバナンス 25
・財務 26
・人財 27
・関連団体連携 28
「ともに新しい扉をあけましょう」 30
終わりに 34

■発行者　宮本恒靖
■発行日　2023年10月

※図、表は「JFA中期計画2023―2026」より
※掲載の原稿、写真、図表などの無断掲載を禁じます
※非売品であり、転売を禁じます。

～ Message ～

変わらぬ思い

サッカーってこの日本でもっと大きな存在になれると思います。
そうなっていかなければいけないと思っています。

毎試合スタジアムが満員になること、親子三世代が手を取り合ってスタジアムに行くことが普通になること、グラウンドがたくさんできて子どもたちがどこでもサッカーできること、そしてワールドカップで日本が優勝するようになること。

絶対そんな日が来ると思っています。

これは、2012 年 7 月 16 日にホームズスタジアム神戸（現・ノエビアスタジアム神戸）で開催していただいた私の引退試合での挨拶の中の一節です。

現役時代から、自分は日本サッカーのために何ができるのか、日本でサッカーというスポーツを大きくするために何をしなければいけないのか、自分が何をすれば日本のサッカーのためになるのかを考えてきました。
ファン・サポーターのみなさんの応援を受けて、クラブ、代表チームのために戦ってきた選手時代。サッカーを、スポーツをより深く多角的な視点で捉えるために引退後に FIFA マスターに留学して学んだ時期。メディアの立場からサッカーを伝えた解説者の頃。指導者として育成年代からスタートし、トップカテゴリーでひりひりした戦いを経験した日々。

その時々で関わり方は異なりますが、日本でサッカーをもっと大きな存在にしたいという思い、軸がいつも私の中にあります。

1994 年、ガンバ大阪ユース主将として J ユースカップ優勝 ©J.LEAGUE

1997 年、FIFA ワールドユース選手権（現 U-20 ワールドカップ）ベスト 8 ©JFA

2002 年、FIFA ワールドカップ 2002 日本／韓国・ベスト 16 ©JFA

2004 年、AFC アジアカップ 2004 中国・優勝 ©BBM

2005 年、ガンバ大阪で J リーグディビジョン 1 優勝 ©J.LEAGUE

2006 年、FIFA ワールドカップ 2006 ドイツ出場 ©JFA

2013 年、国際サッカー連盟の修士課程「FIFA マスター」を修了

2015 年、ガンバ大阪アカデミーで指導者キャリアをスタート。2018 年途中からトップチームを指揮

■ Profile

・宮本 恒靖（みやもと・つねやす）

公益財団法人日本サッカー協会（JFA） 専務理事
1977 年（昭和 52 年）2 月 7 日、大阪府出身
2001 年 3 月　同志社大学経済学部・卒業
2013 年 7 月　FIFA マスター修士課程・修了

スポーツ団体役員歴

2014 年 3 月～ 2016 年 3 月　公益社団法人日本プロサッカーリーグ 特任理事
2022 年 3 月～ 23 年 1 月　公益財団法人日本サッカー協会 理事・会長補佐
2022 年 3 月～　公益財団法人日本サッカー協会 国際委員会 委員長
2022 年 3 月～　公益社団法人日本プロサッカーリーグ 理事
2022 年 4 月～　東アジアサッカー連盟 競技会委員会 委員
2022 年 5 月～　アジアサッカー連盟 競技会委員会 委員
2022 年 7 月～　株式会社 J ヴィレッジ 取締役

サッカー歴

1992 年～ 95 年　ガンバ大阪ユース
1993 年　U-17 日本代表
※ FIFA U-17 世界選手権 ベスト 8
1995 年～ 06 年　ガンバ大阪
※ 05 年 J リーグ年間優勝
※ 06 年 AFC チャンピオンズリーグ
1997 年　U-20 日本代表選手
※ 97 年 FIFA ワールドユース選手権 ベスト 8
2000 年　U-23 日本代表選手
※ 00 年シドニーオリンピック ベスト 16
2000 年～ 06 年　日本代表
※ 02 年 2002FIFA ワールドカップ日本 / 韓国 ベスト 16
※ 04 年 AFC アジアカップ中国 2004 優勝
※ 06 年 2006FIFA ワールドカップドイツ
2007 年～ 09 年　レッドブル・ザルツブルク (オーストリア)
※ 06/07 オーストリア・ブンデスリーガ 優勝
2009 年～ 11 年　ヴィッセル神戸

指導歴

2015 年 2 月～ 15 年 12 月 ガンバ大阪ジュニアユース U-13 コーチ
2016 年 2 月～ 16 年 12 月 ガンバ大阪ユース 監督
2017 年 2 月～ 18 年 7 月　ガンバ大阪 U-23 監督
2018 年 7 月～ 21 年 5 月　ガンバ大阪 監督

■ J リーグ (J1) 通算 337 試合出場 8 得点、日本代表 A マッチ 71 試合出場 3 得点

©J.LEAGUE

CROSS TALK
～特別対談～

岡田武史（日本サッカー協会副会長）×宮本恒靖（日本サッカー協会専務理事）

「JFAが取り 組むべきこと」

日本代表の大先輩であり、指導者としても大先輩の岡田武史・日本サッカー協会副会長と、これからのJFAが取り組むべきことについて対談しました。一つひとつの言葉が重く、私がやるべきことは何か、はっきりと見えてきました。

「ツネが立候補してくれて良かったと思っているよ」

宮本　日本サッカー協会の会長選に立候補するかどうか決断するにあたって相談に乗っていただきまして、本当にありがとうございます。

岡田　ツネがやるべきだと思っていたから立候補してくれて良かったと思っているよ。昔よりも日本代表チームに対する注目度が高くなって、日本代表の監督人事についても多くの人が関心を持ってくれている。代表監督選びについては技術委員会で候補者を選出して、最終的には会長と技術委員長を含めた数名で決めるんだけど、俺は最終的には会長がリーダーシップを発揮して決めなくてはいけないと考えている。俺も代表監督時代から言ってはきたけど、技術委員長ではなくてやっぱり会長がやるべきことなんだよね。自分のサッカー観を持ったうえで決断するわけだから、（会長は）サッカーをしっかりと知っている人のほうが望ましいし、ツネなら言うまでもない。それとJFAは約200億円の予算を持ち、また270人弱の職員を抱える公益財団法人なんだから、大きな組織を引っ張っていくリーダーとしては人間性、論理思考、コミュニケーション能力といったものも求められる。ツネは語学力もあって、海外のネットワークもある。これからの時代にはぴったりの人材だと俺は思っているよ。

宮本　実際にJFAのなかに入ってみて感じたこともありました。岡田さんから〝若いヤツが引っ張っていかなきゃいけない時代なんだ、と言っていただいて、背中を押してもらったようにも感じました。岡田さんがおっしゃるように日本代表の活躍がサッカー人気に直結してきますし、会長が監督人事を決断するその重みというものは理解しているつもりです。また約200億円の予算、270人弱の職員を抱え、関連団体と協力して進んでいく組織としては競技の部分と同様に、マネジメントがとても大切になってくると認識しています。マネジメントの強化によって競技を取り巻く環境も良くなると考えているので、もし会長になることができれば自分としては凄くやり甲斐を感じながら日本サッカー界のために働きたいと考えています。

岡田　ツネには前から言っているけど、これから大変な時代がやって来る。コロナのことや温暖化のこともそうだけど、社会的に何が起こるか分からないというなかで、スポーツの価値とは何か、スポーツはどうあるべきか、そういったことが問われる時代になる。減ったサッカー人口をどう増やすとか、そういったもの以上の課題がいろいろと出てくる可能性があると思うんだよ。アインシュタインは

「いかなる問題も、それが発生したのと同じ次元では解決策が出てこない」と言ったけど、俺はそのとおりだなって思うんだよ。新しい世代の新しい発想が今こそ必要だと思うから。

宮本　大変になってくるんだろうなとは感じています。そこはもう覚悟しています。

岡田　つまり正解が分からない時代なんだよ。ロールモデルがないから過去がどうだったとか振り返ったって、本を読んだって答えが分からない。当然、失敗するんだよ。トライ＆エラーじゃなくて、俺はエラー＆ラーンと言っていて、そういう時代なんだから失敗して学んでいくことが凄く大事になってくる。

宮本　そうですね。当たり前のことを当たり前と思わずに、組織として守っていく部分とチャレンジしていくバランスを大切にしていきながら、組織の内部のみならず外部の力も借りながらうまくかみ合わせていくというイメージを僕は持っています。

岡田　ツネが会長になったら失敗しても切り拓いていこうとする、大きな視点に立って物事を考えていくリーダーになってほしいし、そうなってくれるとも思っているよ。

財政の建て直しは大事。見直すと同時にどう増やすか。

宮本　岡田さんは日本サッカー協会の副会長という立場でもあります。JFA には今どのような課題があると考えていますか？

岡田　一つは財政の建て直し。コロナ禍の影響もあって、収入と支出がアンバランスになっている、と。少なくともトントンのところまでは持ってこなきゃいけない。労務効率を含めて、きちっとした経営をしていくことがまず大事になってくるだろうね。もちろん儲ければいいという組織ではないんだけど、組織として安定させなきゃいけない。

宮本　建て直しは大事ですね。予算を組むときは一層の厳しさを持ってやっていく必要はあると思っています。事業を整理して必要なものは当然残していかなきゃいけないですし、一方で見直すべきものは見直していく。と同時に収入をいかに増やしていくか、いろんな知恵、知見を借りながらやっていかなければなりません。

岡田　あと競技面で言うと、サッカーの普及、振興のこと。日本代表やＪリーグなど、地上波の放送がどんどん減ってきて、サッカーを知らない人がサッカーに触れる機会が段々と減っているよね。ここはＪリーグとも一緒になって考えていかなきゃいけない。そしてもう一つは、気候変動によって夏場のサッカーが非常に難しくなっていること。Ｊリーグのシーズン移行の問題だけじゃなくて、例えば高校年代だってインターハイをどうするんだとか、中学年代はどうするんだとか、いろいろと解決していかなきゃいけない。涼しいところでやればいいと言っても、日本中どこも暑くなってきているわけだから。

宮本　夏場の試合を見ていると、選手が本当に疲弊しているのがよく分かります。選手だけじゃなく監督、コーチ、スタッフ、審判、観客を含め、サッカーに携わるすべての人の安全面を考えていかなければなりません。夏場のスポーツのプレー環境についてはもはやサッカーだけの問題ではありません。シーズン移行となって成功に導いていければ、サッカー界からそういった発信をして社会的な役割を果たしていくことも大切かなとは思っています。

岡田　ツネは JFA の理念、覚えてる？

宮本　はい。「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」です。

岡田　さすがだね（笑）つまり、この理念を実現するために JFA はあるんだよ。ここは絶対に忘れちゃいけないし、ツネが今、「社会的な役割を果たしていくことも大切」と言ったけど、理念はこうなんだと立ち戻ることも大事だと思うね。

宮本　岡田さんは FC 今治の会長を務めていらっしゃいます。８月２日の天皇杯において浦和レッズの一部サポーターが暴力・破壊行為に及んだ件において JFA は来年度大会の参加資格剥奪、浦和サポーター 21 人の無期限入場禁止処分を下しました。暴力行為を許してはいけないというその強い決意を JFA、Ｊリーグ、Ｊリーグの全 60 クラブ連名による声明で示したわけですが、この件についてどのような見解を持っていらっしゃいますか？

岡田　日本のサッカースタジアムは欧州や南米の文化とはまた違って、家族や仲間でやってきてエンターテイメントとしてみんなで楽しんだり、心の拠りどころとしたりして応援する場所なんだ、と。そういうことを日本のサッカー界全体で定義して、発信する機会になったんじゃないかな。

宮本　JFA、Ｊリーグ、Ｊリーグの全 60クラブ連名による声明を出すことで、全体で立ち向かう姿勢を示すことはできました。ただ(関連団体を含めて）もっと広げることができていれば、もっと強いメッセージになったかなとも感じました。選手たちも、サポーターに対して応援してくださいとは言えますが、逆にこういったことはやめてくださいと、なかなか言いにくい。もっと強いメッセージにしていくためには、こちらからいろんなところに働きかけていくことも必要かなとは思いました。

岡田　そうだね。応援のルールを破る人は、我々のお客さんではないんだ、とね。

宮本　岡田さんは日本代表監督として２度、ワールドカップの舞台で戦いました。今の日本代表をどのように見ているか興味があります。

岡田　代表チームというのは必ず波がある。良いときもあれば、逆のときだってある。でも間違いなく言えるのは、確実に日本代表のサッカーはレベルアップしているということ。単に技術が上がったというよりも、日本サッカーの経験値自体が積み上がってきた部分もある。これまでの日本のサッカーはなかなか個で突破できなかった。だからパスワークだ、組織戦術だ、ポジショニングだとやってきたが、欧州でプレーするのが日常になってきて１対１の個で突破できる選手が増えてきたよね。ドイツ代表、スペイン代表といったサッカーの強豪国に対しても俺らも十分やれるよねって、選手も監督もコーチングスタッフもそういうふうに思えるようになってきた。これって凄いことだよ。

宮本　2002 年のワールドカップでトルコ代表と（ラウンド 16 で）戦った際、先に点を奪われて、相手は引いたわけです。僕たちはボールを動かすだけで、本当に厳しいところで勝負できずに点を取れなかった。そして負けました。この先の戦いに進んでいくには、相手のペナルティーエリア内で個の強さを出せる選手、逆にこちらのペナルティーエリア内で同じように個の強さをより出せる選手が必要になってくると、あのとき感じました。岡田さんが言うように両方のペナルティーボックスで個の力を発揮できる選手が今、出てきているのは、日本サッカーが伸びている成長の証だと思いますね。

岡田　「JFA2005 年宣言」で 2050 年までに『FIFA ワールドカップを日本で開催し、日本代表チームはその大会で優勝チームになる』と謳っているけど、あり得るかもなってみんな思い始めているんじゃないかな。

宮本　９月の欧州遠征でドイツ代表、トルコ

「強豪国に対して俺らも十分やれるよねって、選手も監督もスタッフも思えるようになってきた」

代表を相手に勝って、それを見た小学生、中学生といった次の世代の子どもたちも、それが当たり前みたいな雰囲気になっていくと思うんです。U―17ワールドカップ、U―20ワールドカップ、オリンピックでもそのような意識で戦っていくことで、ワールドカップでもベスト8、ベスト4、ファイナルにたどり着く、その道のりをしっかりと歩いているように感じています。

岡田　これほど世界で急激に進歩した国はない。JFAには100年の歴史があって、諸先輩方の尽力を含めてこれまで地道にやってきたグラスルーツ、育成、指導者養成など、そういったものの成果が出てきているよね。

宮本　本当にそう思いますね。自分たちが中高生だった頃を思い出しても、トレセン制度とか育成システムが整備されていました。その後もさらに強化を図っていこうと、U―18プレミアリーグをつくってリーグ戦の文化を取り入れたり、U―16世代の選手に対してプレー機会を創出しようと国体の少年の部において基準を変更したり、そういった工夫の連続が実を結んでいると思います。と同時に子どもたちのレベルはさらに上がっていくでしょうから、指導者養成においてもさらに力を入れていかなければなりませんよね。

岡田　日本がこれだけ急激に進歩したのは何かと言ったら、一つはボランティアコーチの存在なんだよね。地域の人や保護者が教則本を読んで、グラスルーツのところで子どもたちを教えてくれて。こういうのって欧州ではどうなの？

宮本　スイスに住んでいるときに、子どもたちを指導しているボランティアコーチはいましたけど、日本の地域の指導者のように引率して遠征したり、いろいろと世話をしたりってことまではしていませんでした。今後はそういう地域で活躍している方々をもっと大切にしていかないといけません。子どもたちにいい環境でサッカーをしてもらうという意味でも指導者ライセンスの交付というところも考えていく必要はあると思っています。

岡田　学校の部活動だってボランティアコーチがほとんど。実際、ライセンスを取り始めてくれるようになってきているんじゃないかな。情熱を持って教える人が多いっていうのもこの国の一つの特徴だと感じているよ。

宮本　僕も中学校のとき、顧問の先生が情熱を持ってサッカーを教えてくれました。練習メニューを考えてみろとか、任せてくれたりもしました。任せると言ってもほったらかしじゃなく、ちゃんとサポートもしてくれて。僕のようにそうやって地域の小学校や中学校で育った選手は少なくないんじゃないですかね。これからの時代は部活動の外部指導員のことなども考えていかなければいけません。

岡田　さっきも言ったように、これからはロールモデルのない時代を生きていくわけよ。主体性が大事になってくるのはスポーツだって一緒。サッカーをやっていくなかで子どもたちの主体性を養っていける。

宮本　主体性が大事というのはまったく同感です。サッカーにしても、刻一刻と状況が変わっていくなか自分で主体的に判断して行動していかなきゃいけない。僕も子どもたちを指導してきたなかで、自分で状況を判断して決断していくようにとは常々言ってきました。主体性の大切さを教えていけるのはサッカーの良さでもあります。その主体性を実生活においても出していけるような社会であるべきだ、と。サッカーが持つ教育的な機能については、もっと大事にしていきたいですね。

海外でのプロ経験を持つ人が、欧州で指導者になる時代へ。

宮本　先ほど日本の選手たちが欧州でプレーするのが日常になってきたという話がありました。岡田さんは中国のクラブでも監督を務められましたけど、日本の指導者の可能性についてはどのように思っていますか？

岡田　段階を踏んでいかなきゃいけないとは思うよ。僕らの現役時代はプロがなかったから、その経験がないうえで指導者をやった。次はプロ選手だった人が監督になって、その次は海外でプロの経験を持つ人が監督になって、みたいになっていくとは思うよ。フランクフルトの長谷部（誠）のことがパッと頭に出てくるけど、引退して指導者としても欧州で活躍してくれたら、また一つ段階が引き上がることになるよね。欧州でプレーする選手は本当に多いし、そこで指導者を目指す流れが出てくるかもしれない。育成においてもアジアのほうでは日本の指導者がいいと言われているよね。ここは日本代表チームが強いことも関係しているんだけど。

「組織として守っていく部分とチャレンジしていくバランスを大切に」

宮本　分かります。僕も一足飛びにはいかないとは考えています。プラス、岡田さんが言われるようにその国の育成、強化の評価につながることを考えると、日本代表チームが強くなくちゃいけないっていうのはあらためて感じますね。

岡田　ツネはオーストラリアとニュージーランドで開催された女子ワールドカップを視察したんだよね。実際、自分の目で見てきて女子サッカーの可能性についてはどう感じた？

宮本　現地で女子サッカーの盛り上がりを自分の肌で感じましたし、なでしこジャパンやスペインみたいなサッカーを目指すべきという高い評価も受けました。世界のベンチマークになっていける可能性があるとも感じました。スペイン代表とイングランド代表の決勝戦も観戦しましたが、レベルが高くて、エンターテイメントとしても十分に見応えがありましたね。

岡田　ツネがそう言うなら、女子サッカーの今後は楽しみだね。

宮本　だからWEリーグを盛り上げていくために、もっとやれることがあるんじゃないかとも考えています。クラブ数、アンダー世代の強化、資金面など、ここはリーグ側とも歩調を合わせながら可能性を広げていけるんじゃないか、と動いているところではあります。

岡田　現状、WEリーグはお客さんがたくさん入っているとは言えないよね。女子サッカーの裾野を広げたり、中身を濃くしていったり、コンテンツとしての魅力を上げていくことが世界で勝つことにもつながってくると思う。ツネが会長になって、その若い感覚で、思うようにやったらいいよ。

宮本　40代なかばの若輩者ですから、周りの協力を得ながら、教えを受けながら一緒になって前に進んでいきたいとは思っています。

岡田　みんながワクワクするようなJFAにしてくださいよ。

宮本　みんながワクワク……肝に銘じます。

岡田　JFAの会長が確実な公約を立てて、確実なことをやっていくこともちろん大事ではあるよ。でも今の時代、みんながワクワクするようなムーブメントをつくっていくことを求められているんじゃないかな。ツネならみんなを巻き込んでやれるだろうし、それはもちろん俺も協力するし、ツネがやるなら喜んで協力するって言ってくれてる人たちも大勢いるから。

宮本　ありがとうございます。この世のなかにおいてサッカーがもたらす力、サッカーだからこそできる貢献は、多々あると思っています。これまでも岡田さんから話をいろいろとうかがってきて、自分がやりたいこと、やらなければならないことを整理できました。会長になって、サッカーをもっと大きな存在にしていきたいと思います。本日はありがとうございました。

JFA 中期計画 2023 − 2026とは？

JFA は 2023 年 3 月に「JFA 中期計画 2023―2026」を発表しました。新型ウイルス感染症の拡大やウクライナ危機といった不安定な国際情勢、そしてまた多様性を活かすダイバーシティなど社会課題、テクノロジーの進化……そういったドラスティックな環境変化にあるなかでも、サッカーの価値というものは不変だと言えます。FIFA ワールドカップカタール 2022 で見せた SAMURAI BLUE の活躍は、感動、共感、一体感をもたらしてくれました。サッカーの力はあらためて大きなものだと認識させられた次第です。

私は JFA の専務理事という立場からこのプロジェクトの中心となって立案、作成にかかわりました。変わりゆく時代にサッカーはどのように応えていくべきかに重点を置き、JFA の目指していく指針を示しています。内容を JFA のホームページにて掲載していますが、フレーズ、写真、レイアウトを含めて見せ方に特にこだわったのは JFA や関連団体の関係者のみならず、サッカーファミリーやパートナー企業、もっとライトなターゲットにも分かりやすく伝えていくためでもあります。JFA として時代からの要請や社会課題にコミットしていく決意をあらわす内容にもなっています。この場をお借りしてあらためて一つひとつを提示していくとともに、プロジェクトをまとめた立場として自分なりの言葉で説明していきたく思います。みなさんと一緒に、手を取り合って「JFA 中期計画 2023―2026」を確実に進めていきたいと考えています。

中期計画の中身

- ☑ 日本代表の活躍
- ☑ スポーツ・サッカーの拡大
- ☑ 社会課題への挑戦
- ☑ 新たな成長モデルの構築

これまでの取り組みを継承

- ☑ ガバナンス
- ☑ 財務
- ☑ 人財
- ☑ 関連団体連携

持続可能な組織へと革新

▼

JFAの理念の実現

現状認識

FIFAワールドカップカタール2022においてSAMURAI BLUEは優勝経験のあるドイツ代表、スペイン代表に勝利しました。今や日本代表選手の多くが欧州のリーグでプレーするようになり、UEFAチャンピオンズリーグに出場する選手、欧州のトップクラブに所属する選手もどんどん増えていく傾向にあります。この状況は間違いなく日本代表のパフォーマンスの向上そのものにつながっていると認識しており、「JFA2005年宣言」にある2050年までに『FIFAワールドカップを日本で開催し、日本代表チームはその大会で優勝チームになる』という約束に向けて力強く前進していることは言うまでもありません。

一方、なでしこジャパンもFIFA女子ワールドカップオーストラリア＆ニュージーランド2023でベスト8となり、世界から高い評価を受けました。現地を訪れた際、なでしこジャパンの戦い方こそが女子サッカー全体が目指していく姿だと言われ、ベンチマークになる存在なのだと強く実感できました。

五輪代表、育成年代、ビーチ、フットサル含めすべての日本代表において国際大会の最高成績を更新することを目指していきたいと考えています。

Appendix: 中期計画策定にあたっての補足情報

1. 現状分析について：今後4年間の国際大会スケジュール（現時点想定）

今後4年間の主要大会のスケジュールは下記の通り。各カテゴリにおける中長期的な強化・育成活動が必須となる。

	2023年	2024年	2025年	2026年
SAMURAI BLUE	FIFAワールドカップ 2次予選	FIFAワールドカップ 最終予選、AFCアジアカップ、	FIFAワールドカップ 最終予選	FIFAワールドカップ（アメリカ/カナダ/メキシコ）
NADESHIKO JAPAN	FIFA女子ワールドカップ（オーストラリア／NZ）	オリンピック／パラリンピック（パリ）	—	AFC女子アジアカップ
五輪代表	—	オリンピック／パラリンピック（パリ）	—	—
育成年代	FIFA U-20／U-17 ワールドカップ	FIFA U-20／U-17 女子ワールドカップ	FIFA U-20／U-17 ワールドカップ	FIFA U-20／U-17 女子ワールドカップ
フットサル／ビーチ	FIFAビーチサッカーワールドカップ	FIFAフットサルワールドカップ	FIFAビーチサッカーワールドカップ	FIFAフットサルワールドカップ

※ 2023年11月に開催予定だったFIFAビーチサッカーワールドカップは、2024年2月開催に変更となりました

日本代表の活躍

世界の頂点に向けた挑戦
（ナショナルフィロソフィーに基づく改革活動）

「ナショナル・フットボール・フィロソフィー」に基づく JAPAN`S WAY の推進を図っていきます。SAMURAI BLUE は世界的に実力のあるチームと対戦するにあたっても互角以上に戦えるという意識で選手たちがプレーしており、もともと備えていた規律、一体感に、個々の強さも加わり、その姿勢や自信というものを非常に頼もしく感じています。選手たちからはワールドカップ優勝を目標に置くコメントが聞こえてきており、それを後押ししていく体制を整えていきたい。男子のみならず、なでしこジャパンの戦い方は世界のベンチマークになっており、次回 2027 年の女子ワールドカップで再度チャンピオンになるべく、継続した強化をしていきます。

©JFA

国内コンペティション・リーグの強化
（日程の最適化とシーズン移行の検討）

シーズンの秋春制移行についてはさらに議論を深めていく必要があります。秋春制のメリットとしては、気候変動により酷暑になった夏場の試合を減らせること。競技レベルも落ちますし、プレーヤーズファーストの観点からも選手の健康を守ることは最重要で、指導者やスタッフも同様です。ACL も欧州と同様に秋開幕となり、シーズン途中で選手が日本から海外移籍するカレンダーのズレが生じる難しさもあります。一方で高校、大学卒業との「期ズレ」はデメリットにもなりうる。日本のサッカー界がより強くなっていくためには、どうするべきか。JFA としては J リーグが移行の決定を下した場合でもスムーズに進むように、しっかりと準備をしておく必要があると考えます。

指導者の国際化
（海外経験促進と JFA ライセンスの価値向上）

日本代表チームに対する評価が高まる中、比例して日本の指導者への評価も高くなっています。JFA としては指導者の海外経験促進と JFA ライセンスの価値向上に取り組んでいきたいと思っています。日本の指導者の活躍の場がすでにアジアに広がっているなか、これからは欧州でも勝負できるように指導者レベルをさらに引き上げていきたい。日本と欧州におけるライセンスの互換性という問題についても踏み込んだ議論が必要になってきます。私は JFA 公認 S 級コーチライセンス、UEFA 公認 B 級コーチライセンスを取得しましたが、日本と欧州では講習内容も異なります。どちらが良い悪いではなく、違った切り口から見ていくことも考えていかなければなりません。

スポーツ・サッカーの拡大

現状認識

「JFA2005年宣言」において「2050年までにサッカーファミリーを1000万人に」と目標を記しています。少子化、新型コロナウイルス感染症の影響によって選手登録者数自体が減ってしまったものの、第4種（12歳以下）のチームに所属するサッカー及びフットサル選手のJFA登録料を無料化にする施策などで徐々に戻ってきていると認識しています。

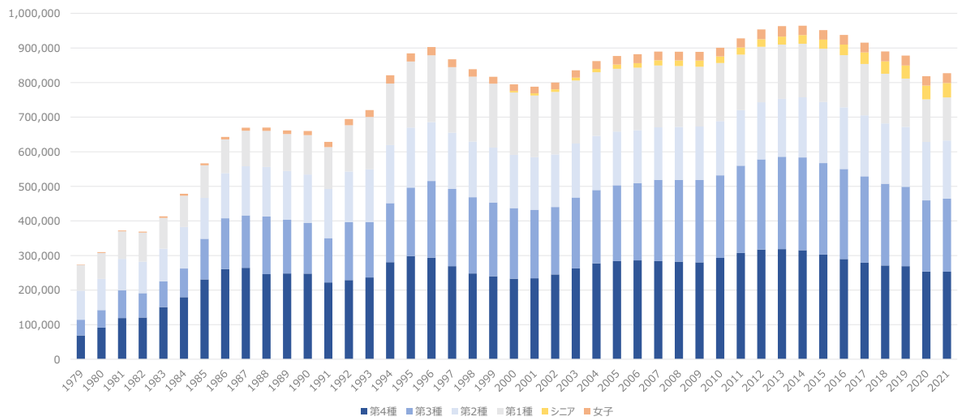
サッカー界をピラミッドになぞらえると普及、振興という土台の上に「エリートスポーツ」「生涯スポーツ」の2つがあります。つまりは日本型ダブルピラミッド。土台の広がりはもちろんのこと「エリートスポーツ」としてのみならず、シニアまでサッカーを楽しんでいける「生涯スポーツ」としての体制を整えていきたい。競技者のみならず、コア層のサッカーファンからライト層までサッカー愛好者を増やしていくことが大切になってきます。

中期計画ではそれぞれのニーズに合わせた情報を提供していく「JFA Passport」利用者が350万人に到達することを目指す姿としています。

Appendix：中期計画策定にあたっての各種補足情報

1. 現状分析について：サッカー登録者状況

サッカー登録者は100万近い水準まで成長も2014年以降は減少傾向が続く。直近はコロナ影響も顕在化したが、今後も少子高齢化や都市部への人口集中・部活動改革など中長期的な社会変化・トレンドが想定されるため、各年代・地域特性に合わせた打ち手の展開が急務に。



登録制度改革（新制度及びデジタルプラットフォームの構築）

今後の運営を予定する「デジタルプラットフォーム」を活用し、チーム主体から個人主体への登録制度にしていく新制度を設計。現制度の課題となっているのがアマチュアにおけるスムーズな移籍です。たとえば高校生が所属チームを離れて次のプレー先に移った際、６カ月間試合に出られないケースもあります。より選手個人に紐づいた制度改革に切り替えていくことで、空白期間をなるべくつくらずにスムーズにしたい。「デジタルプラットフォーム」に登録したデータで処理できれば、手続きに掛かる時間を短縮し、運営費も削減できます。「JFA Passport」との連携も図っていきます。

重点３領域（キッズ・４種 / 女子 / シニアへの継続アプローチ）

JFA が最も力を入れなければいけない領域。47 都道府県 FA と連係を図っていくことが何よりも肝要になってきます。キッズへの普及を土台に U-9 年代の活動をサポートし、４種全体の登録数を伸ばしていくことで、「エリートスポーツ」「生涯スポーツ」というダブルピラミッドの強靭化につながっていきます。一方、人生 100 年時代の中、サッカーを生涯スポーツとして選択するシニアプレイヤーを増やし、健康増進につなげていきたい。女子サッカーについては伸びしろしかない。ポイントを一つ挙げるなら全日本高校女子サッカー選手権で各都道府県から代表校を出すことで、登録の少ない U-15 のクラブを全国に増やし、それが競技人口の増加につながる施策を図りたい。

リスペクト・セーフガーディング（安心・安全のサッカー界全体での実現）

８月２日の天皇杯において浦和レッズの一部サポーターが暴力・破壊行為に及んだ件に関して JFA は来年度大会の参加資格剥奪、浦和サポーター 21 人の無期限入場禁止処分を下しました。いかなる理由があろうとも暴力行為を許してはいけません。その強い決意が JFA、Ｊリーグ、Ｊリーグの全 60 クラブ連名による声明で示されています。

老若男女が楽しんでサッカー観戦してもらえるような環境を守っていかなければなりません。その環境づくりがひいてはサッカー愛好者の拡大にも結びつくはずです。また、JFA は子どもたちがサッカーを安心・安全に楽しめるセーフガーディングポリシーを示しています。指導者、チームメイト、相手チームとの関係性を含め、暴力、暴言といった成長や行動を阻害することから守るセーフガーディングの大切さを伝えていきたい。

審判員育成（すべての人に、フェアで、安心・安全な試合を）

日本サッカーを発展させ、競技を高いレベルで成り立たせていくためには、審判員を育成していくことも外せない要素になります。現状、若くして審判員のキャリアを目指す例がやはり少なく、早い段階から審判員キャリアを目指せるよう提示できるようにしていきたい。すべての人に、フェアで安心・安全な試合にしていくためにも、審判員人口を増やし、育成していくことが大切になってきます。

施策の最適化（定量指標に基づく普及施策の検証）

JFA として取り組む普及施策が正しいのかどうか、主観的な評価ではなく数字に基づいた評価をしていくことが大事です。定量指標に基づく普及施策を検証したうえで、事業を継続していくかどうかの判断をしていくことになります。また、目標においても数字を掲げて取り組んでいきたい。「JFA Passport」利用者は 350 万人に到達することを目指していきます。アプリを上手く運用・活用できればこれまで以上にサッカーファミリーの広がりを期待できます。例えばスポーツ施設運営者やサッカーショップ、スポーツバー関係者なども普及に重要な役割を担っており、今まで以上に多様な人が楽しく関われるようにしたい。

Appendix：中期計画策定にあたっての各種補足情報

2. アクション・目標について：JFA Passportの運用と登録管理基盤システムの改革

サッカー界の2つのIT基盤システムを開発し、リアル(アナログ)におけるサッカーとの出会いやその後の成長・感動をデジタルで下支えする。

現状認識

JFAは社会貢献、SDGsの達成につながる活動を「アスパス！」と総称し、「誰ひとり取り残さない」サッカー界の実現を目指すことを「JFA中期計画2023―2026」でも明記しています。環境、人権、健康、教育、地域を５つの重点課題とし、JFAは加盟団体とともに戦略的に施策を推進していきます。JFA内に設置された社会貢献委員会のもと、温室効果ガスの算定（環境）、誰も取り残さない競技観戦環境（人権）、ダイバーシティ＆インクルージョン（健康）、コロナ禍でも学びを止めない（教育）、Think Globally,Act Locally（地域）など各種取り組みを実施しており、今後はより広がりを持たせていきたいと思っています。

インクルージョン／アクセス・フォー・オール（誰もがサッカーファミリーの一員として活躍）

2014年の「JFAグラスルーツ宣言」に続き、2024年１月に次のステップとしてすべてのマイノリティーを含むサッカーファミリー全員を対象として、多様な機会と選択肢を持続的に届け、ダイバーシティ、インクルージョンの推進において世界のモデルとなるべく「アクセス・フォー・オール宣言」を出す予定です。誰もがサッカーファミリーの一員として活躍できる社会を目指す取り組みに一層力を入れていきたいと考えています。

脱炭素化（事業における炭素排出量の測定・削減）

９月９日、日本代表が欧州に遠征してドイツ代表と国際親善試合を行なった際、試合前に交換したドイツ協会のプレートには「あなた方が遠征時に排出した二酸化炭素を、我々がオフセットいたします」との宣言が記されてありました。非常にいいアイデアだと感じました。気候変動とスポーツは無関係ではありません。暑熱下でのプレー環境の問題は我々の最重要課題のひとつです。JFAとしてもオフセットの提示などを含めて具体的な施策を打ち出していく必要があります。

心と体の健康・ウェルビーイング（関連委員会と連携した情報・施策の展開）

人生100年時代に入った社会において、クオリティ・オブ・ライフを高い質で保っていくためにもサッカー界として積極的に動いていきたい。具体的な例として、スポーツ経験が少なくても参加可能なウォーキングフットボールの浸透です。サッカー未経験者や高齢者を含めてエンジョイできるとあって、ウェルビーイングやダイバーシティ、インクルージョンの観点からも強く押し進めていくべきでしょう。私もプレー経験がありますが、体も心も温かくなると実感でき、時代の要請とも言える競技ではないでしょうか。

スポーツの場の継続提供（部活動の地域移行支援と教育行政連携）

スポーツ庁の指針を受け、学校の部活動は学校主体から地域主体に切り替わっていく動きが加速していきます。47都道府県、９地域FAとコミュニケーションを取りながら既に移行を進めている各地域の状況をリサーチしつつ、地域移行支援と教育行政連携を図っていく必要があります。各地域それぞれに状況、背景が違っているため、それぞれに合ったテーラーメイド方式での地域移行が望ましい。価値共創の切り口からも、パートナーと一緒にサポートしていく可能性も探っていきたいと思います。

社会課題への挑戦

新たな成長モデルの構築

©JFA

現状認識

2022年度決算は、収入が191億1149万円に対して支出は239億9271万円で約48億8000万円の赤字となっています。コロナ禍の影響を踏まえて46億円超の赤字予算を組んでおり、先輩方が残してくれたJFAの特定預金を取り崩したため実質の赤字は3億5000万円ほどになりました。2023年度予算はJFAハウス売却益など、前年比で100億円増となり、67億円を超える黒字を見込んでいます。新たな価値を創出して新規事業に結びつけていくとともに、現状行なっている事業も取捨選択していくことが大切です。

ファンエンゲージメント

テクノロジーを活かした次世代型を意識したサッカー文化創造拠点となる新たな施設を東京ドームシティ内に立ち上げます。芝生が敷かれた多目的空間エリア、飲食エリアなども設け、新たな体験価値の創出を図ることでコア層のサッカーファンのみならずライト層とも接点を持っていきたい。DX推進を掲げ、「JFA Passport」の浸透にも努めていきたいと思います。

価値共創

SDGsやESG投資などに力を入れ、社会的責任を意識する企業活動が活発化しており、これまで以上に意識していくことは必定です。2023年より新たなマーケティングスキームを構築してパートナー各社と契約を締結しており、今後は「共創」を軸としたアクティベーションがカギになってきます。どのような施策を行えば社会のためになっていくか。パートナーとお互いの資産、ネットワークを活かしていくことで、価値共創を実現させていきたい。

新たな収益の柱

従来とは違った新たな収益を模索していくことがJFAの発展には欠かせないと考えています。新規事業による成長原資の確保についてはJFA内で協議しており、今後具体的に提示していきたいと思います。

ガバナンス

©JFA

現状認識

理事数を、現状の27名から15～9名にスリム化することによって日本のサッカー界をさらに良くしていくために有意義な議論ができる場にしていけると考えています。この変更の本質はコミュニケーションの質を高め、物事を前に進めやすくするためだと捉えています。

強い組織統制

理事会を管理、監督という立場に専念する形にし、業務執行については事務総長と特定の委員会委員長に権限移譲していきます。よりスムーズな意思決定を実行し、スピード感を持った運営を可能としたい。一方でスリム化の効果がしっかりと出ているかどうか、検証していくことも重要です。

社会規範・要請

JFA及び関連団体における規定・制度・運営をチェックするとともに、不正やハラスメントの防止、または対応する体制を整えていきます。かつ、それらに対する意識づけの徹底もしっかり図りたいと考えています。

スポーツ団体ガバナンスコード

2019年にスポーツ庁が「女性理事40%以上、外部理事25%の登用」を定めたスポーツ団体ガバナンスコードの達成を念頭に置き、適合性審査への対応をしていきます。様々なバックグラウンドや視点を持った優秀な方々にJFAの運営に携わってもらうことも目指していきます。

©JFA

©JFA

財務 >

現状認識

JFA ハウスは 2002 年ワールドカップを成功に導いてくれた先輩たちが大きな財産として残してくれました。心から感謝したいと思います。その JFA ハウスの売却益をどのように有効活用していくか。J リーグが秋春制に移行した場合、施設の整備に掛かる資金などしっかりと準備しておくほか、重点領域のキッズ・女子・シニアにも投資していかなければなりません。各方面と歩調を合わせながら、しっかりと戦略を練っていくことが重要だと考えます。

収支均衡

認識においては「新たな成長モデルの構築」で示したとおり。収入を増やしていく努力をしつつ、支出において見直すべきところは見直していく必要があります。ただ、あくまで長期的な視野に立って収支均衡を見据えることが重要であり、短絡的な見直しにならないよう慎重に進めたい。環境変化に応じて事業を最適化し、戦略投資を継続しているのが目指すべき姿です。

収入ポートフォリオのシフト

事業収入の 10%以上を新規事業に注いでいくことを「JFA 中期計画2023—2026」においてポイントとなるアクションとして明記しました。新しい試みを視野に入れ、成長戦略を練っていきたいと考えています。

計画的な戦略投資

計画のうえでは、J リーグが秋春制に移行した場合に備えて降雪地域などに対して施設助成金に充てる準備はしておかなければなりません。そのことを対象地域にしっかりと伝わるようにしていく必要もあります。また、中長期発展を見据えた戦略投資というものも大事にし、実行に移していきたい。

©JFA

人財 >

現状認識

JFA 及び関連団体には素晴らしい人財がたくさんいます。それぞれの持ち場で能力をさらに発揮していけるように環境をつくっていくことが大事になります。かつ、関連団体との連携を進めていくことができる人財を強化していかなければなりません。JFA と関連団体がよりフランクにコミュニケーションを図りながら、さらなる成果を得られるようにしていきたい。

女性活躍・多様性による価値創出

「女性職位就任者を 10%増」とポイントとなるアクションを示しています。女性の視点を大切にしていくべく JFA では女性活躍のためのプログラムを実施しており、WE リーグが掲げる女性活躍社会の実現に向けて積極的に動いていきたい。またダイバーシティという観点からも、全員が活躍できる JFA でありたいと思います。

企画・推進人財の強化

マーケティング、プロモーションなど専門的な領域において内部の人財を強化していきたいと思います。と同時に JFA のポテンシャルをより活かせる、サッカーを愛し、サッカー界に貢献したいという人財を外部から呼び込んでいくことも考えていかなければなりません。

生産性の向上

現在も企業風土を変えようというプロジェクトを行なっており、その延長線上において職員がより働きやすく、働く意欲を持って仕事に取り組めるようなオフィスづくりを目指したい。業務水準を維持し労働時間を 10% 減にすることはポイントとなるアクションの一つです。働く人々のプライベートな時間を大事にするというこれからの時代の労働文化もしっかりと創出していきたい。

現状認識

日本サッカーが強くなっていること、才能豊かな選手が継続して輩出されていることは９地域、47都道府県FAをはじめ、みなさんの長年にわたる普及、振興、育成、強化の賜物であり、深く感謝したいと思います。この先の日本サッカーの未来を支えていくのもみなさんの力があってこそ。JFAとして日々のみなさんの仕事に対して敬意を表すとともに、これからも手を携えて一緒になって歩みを進めていきたいと考えています。コミュニケーションを取り、施策や課題をともに共有して地域により向き合っていく姿勢を大切にしていきたいと思います。

９地域 47FA等の 加盟・関連団体 支援

47FAの自立に関してはこれまでにもそれぞれ取り組んでいただいています。JFAとしては取り組みの中から成功例を提示し、共有することでサポートしていくことが重要です。地域によってフットボール領域なのか、マーケティング領域なのか課題や背景が違っていることを十分に考慮して、テーラーメイドで対応していきたいと考えています。47FAの活動価値を適切に示すことによって地域行政や企業からの支援が広がっていくことも期待しています。

Ｊリーグ / WE リーグ 連携強化

Ｊリーグ、WEリーグともにいつの時代であっても若いタレントを継続して輩出していけるようにしていく必要があります。私も育ってきたＪリーグは30周年を迎え、競技レベルもアジアや世界における地位も引き上がっているものの、まだまだ上のレベルに進むことができると信じています。またWEリーグは開幕して３年目を迎えましたが、女子サッカーの世界的な盛り上がりという潮流にまだ乗り切れていない印象を受けています。JFAとしてもフットボール領域、マーケティング両面でサポートしていきたい。いずれにせよトップリーグと十分な連携を図り、施策効果を最大化させていきます。

国際戦略

国際的なサッカーの方向性はFIFAやAFCで話し合われており、意思決定がなされる前に、その情報、傾向、流れをつかんでおくことは日本サッカーが判断に迫られた場合において極めて重要です。そのためにもFIFAやAFCの事務局や委員会、理事会にJFAから継続的に人材を派遣するよう体制を整えることは必要不可欠です。

関連団体連携

連盟・団体と取り組んでいきたいこと

「ともに新しい扉をあけましょう」

関係各連盟・団体のみなさんの尽力があってこそ日本サッカー界は発展していくことができています。あらためて敬意を表したいと思います。各連盟、団体としっかりとコミュニケーションを図りながらそれぞれの現状や課題を共有しつつ、これからもみなさんとともに歩んでいきたいと考えています。

中体連

現在の日本サッカーを長きにおいて支えてくれたのは、間違いなく全国に広がる中学校の部活動であり、その貢献は計り知れません。自分自身の中学時代の経験でも様々な方からのサポートを受けながら、部活動でサッカー選手として成長できた感謝の思いを持っています。部活動の地域移行は喫緊の重要事項であり、今後も JFA として部活動を支えていくことが重要だと考えています。

日本クラブユースサッカー連盟

日本クラブユースサッカー連盟は身近な地域や市町村のクラブチームに選手たちが参加できる環境を整え、エンジョイ、プレーヤーズファーストの観点においてとても大きな役割を果たしています。Ｊリーグクラブのアカデミーの参加が増える一方、独自のフィロソフィーを持つクラブも結果を残しており、いろいろな特長を持つ選手を輩出する土壌となっています。これからも育成年代の選手の日常のプレー環境を整備するうえでも日本クラブユースサッカー連盟としっかりと協働していきたいと思います。

©JFA

©JFA

©JFA

高体連

決勝戦で６万人の観客が集まるという全国高校サッカー選手権の規模は世界的に見ても稀であり、100 回を超える大会を開催してきた重みもあります。これまで多くの日本代表選手を輩出し、これからもユース年代のサッカーを支えていく極めて大事な場所であることに変わりはありません。男子のインターハイは 2024 年以降、Ｊヴィレッジで固定開催となる一方、女子のインターハイは 2025 年まで北海道で開催されますが、その後については未定となっています。高体連の方向性に基づき、男女ともによりよい環境でプレーできるように支えていきたい。

大学サッカー連盟

大学サッカーは日本において 18 歳以上の選手の重要な強化、育成の場として揺るぎない地位を確立しています。カタールワールドカップの日本代表メンバー 26 人のうち、９人が大学サッカー出身者でした。この秋、中国・杭州で開催されたアジア競技大会においても大学生の選手たちが日本代表チームに貢献し、男子は準優勝、女子は優勝という結果を収めています。世界に誇る日本の育成システムの一つであり、さらなる充実を図っていくべく JFA としても支えていきます。また選手育成のみならず、将来日本サッカーを支えるマネジメントやスカウティングの人財育成においても協力していきたいという考えを持っています。

JFL

前身の JSL から 50 年以上という伝統を誇り、長年にわたって日本のサッカーを支えているのが JFL です。地域との結びつきも強く、普及の側面を担う存在であり、J リーグ入りを目指すクラブ、企業の理念を体現するチームなど日本サッカーの多様性に厚みをもたらしている貴重なリーグであることは間違いありません。今後は J3 リーグとの入れ替え戦も始まります。より魅力ある JFL になっていくためのサポートを、JFA としてもやっていきたい。

なでしこリーグ

これまで 30 年以上にわたり日本の女子サッカーを牽引してきたリーグです。WE リーグが開幕し、アマチュア最高峰のリーグへとなりましたが、高校や大学を卒業した後の女子選手の受け皿として、地域に愛される存在として、未来をつなぐ場所として、強化、育成、普及、地域性、多様性などの点から、更に重要な役割を担うことは間違いありません。日本の女子サッカーの発展に直結するなでしこリーグの発展をしっかり支えていきます。

全国社会人サッカー連盟

J リーグ入りを目指すクラブから、サッカーを楽しみたいと思う人が集って活動するチームまで、競技スポーツまたは生涯スポーツとプレーヤーの志向も多様化しているなかで、うまく両立できているのは全国社会人サッカー連盟による尽力の賜物です。気候変動に伴うシーズン移行問題については引き続き議論が必要だと認識しています。

日本フットサル連盟

2022 年に F リーグが法人化し、日本女子フットサルリーグを含めて新たなステージに入っています。2024 年にはウズベキスタンで開催される FIFA フットサルワールドカップが控えており、グループリーグを突破した前回大会以上の成績が期待されます。フットサルは子どもから大人まで老若男女が楽しめるサッカーファミリーにとっても非常に重要な競技であり、フットサル振興のために JFA としても積極的に動いていきたい。

©JFA

©JFA

©JFA

日本ビーチサッカー連盟

2024 年に UAE で開催される FIFA ビーチサッカーワールドカップでは優勝への期待が懸かります。ワールドカップをきっかけに地域の活動や地域のクラブの数を増やしてくことに JFA としても積極的に協力していきたいと思います。環境保全、環境問題への対処という観点からもビーチサッカーは重要な役割を果たすと考えています。

障がい者サッカー連盟(JIFF)

JIFF に加盟する 7 団体の課題を共有し、障がいの有無に関わらず誰もがいつでもどこでもスポーツを楽しめる環境の創出のためさらに連携を深め、共生社会実現へ向けた活動を JFA としてしっかりサポートしていきたい。ダイバーシティ、インクルージョンを日本サッカー界が先頭に立つ気構えで取り組んでいく姿勢こそが大切だと考えています。

日本プロサッカー選手会(JPFA)

特に近年は具体的かつ実用的な提言を JPFA から受けており、選手におけるプレー環境の改善に役立てていきたい。また、統一契約書の見直しについては、引き続き議論していくなかで選手の待遇の改善にもつなげていきたいと思っています。プレーヤーズファーストを大切に、JPFA と密にコミュニケーションを取っていくことが大切になってきます。

日本サッカー指導者協会

指導者の地位を高め、そして守り、また成長させてくれる環境を整えている日本サッカー指導者協会の存在は、指導者ライセンスを持つ一人としても心強く感じています。オンラインセミナーを通じてコーチングに関する様々な知見が共有されていることは、日本及び海外で活動するたくさんの指導者にとって非常に有益であり、これからもぜひ日本サッカーの発展につなげてもらえればと思います。

終わりに

2023年10月、ウズベキスタンで開催されたAFCの会長、専務理事会議（AFC PRESIDENTS' & GENERAL SECRETARIES' CONFERENCE 2023）に出席した際、各国の会長や専務理事から、「日本の育成システムについて興味があるから視察させてほしい」、「このカテゴリーにおける日本の指導者を派遣してもらえないか」、など多くの方から要望があり、日本サッカーに対する高い関心や興味をあらためて感じました。

1993年にJリーグが誕生してから30年。日本サッカーは世界でも類を見ないほど急速に、そして着実に力をつけてきました。私たちの代表チームは近年、男女ともに自信をみなぎらせてプレーし、世界の舞台で躍進しています。日本サッカーはアジアのみならず世界からも注目を集め、代表チームだけでなく、育成面や、クラブの取り組み、運営やホスピタリティの面でも高く評価されています。

日本サッカーの国際的な評価の高まりは、選手たちの活躍だけでなく、日本各地で素晴らしい仕事をしているみなさんの、これまでの努力が実を結んだ結果でもあります。普及や育成に携わっている指導者の方々、さまざまなカテゴリーの大会やイベントの運営に携わっている方々、ボランティアの方々。私はこういった日本サッカーを支えている方々の存在を大切にしていきたいと思っています。

日本サッカーがより文化として発展すべく、世界のなかで日本サッカーの存在感をさらに示していくべく、次の100年に向け、ともに歩んでいきましょう。

サッカーをもっと大きな存在に——。強い決意を持って、日本サッカーのために力を注いでいく所存です。何とぞよろしくお願いします。

©JFA